



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Tomoko Matsudaira and Home Economics : The Transformation of Consumption and Women in Japan
Author(s)	張, 媛婷
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第16877号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16877
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99722
Type	doctoral thesis
File Information	Zhang_Yuanting_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）

氏名：張 媛婷

	主査	准教授	齊藤 尚
審査委員	副査	助教	WANG KESONG（王 科淞）
	副査	教授	橋本 努

学位論文題名

Tomoko Matsudaira and Home Economics: The Transformation of
Consumption and Women in Japan(松平友子と家事経済学——日本にお
ける消費と女性の変容)

本論文は、日本における家事経済学の先駆者である松平友子（1894-1969）の貢献を、経済学史・経済思想史に位置づける試みである。

第1部は、日本の家事経済学の歴史とその社会的背景を説明している。

第1章は、1800年代後半から戦後にかけての家政学の発展をたどる。日本が工業化を遂げ、女性が近代教育を受けるにつれて、家政の管理は、効率性・合理性・近代化を担う学問分野の一つとなった。本章は、日本の家事経済学とアメリカの家事経済学の成立事情を比較することによって、松平の研究が生まれた背景の特徴を浮き彫りにしている。

第2章は、当時の消費行動の変化、女性の教育の拡大、生活協同組合や女性団体の台頭といった、家事経済学に影響を与えた社会現象とその変化を分析している。1960年代以前の日本において、家事経済学は、とりわけ当時の社会経済状況への知的対応として出現したことを説明している。

第2部は、松平の知的発展と主要な理論的貢献を探っている。

第3章は、松平の伝記に関する研究である。彼女が受けた教育、女性の高等教育への参加が限られていた時代に経済学の道へ進んだこと、そして彼女の経済学研究に影響を与えた先行する諸研究を、それぞれ検討している。また本章は、既存の学術研究における松平の受容についても検証し、彼女の思想の意義を歴史的に位置づけている。

第4章は、松平の家事経済学の4つの主要テーマ、すなわち、所得、支出、会計、貯蓄の四つを分析している。松平は、家計を経済の単位として捉え、名目所得よりも実質所得を重視し、家族内の透明性と協力を促進するために複式簿記を奨励した。

これらは、家計管理の実践的な指針であるだけでなく、経済の論理と社会問題の両方を反映した理論モデルから擁護されていることを明らかにしている。

第3部は、松平の思想を比較思想の観点から考察している。

第5章は、消費理論の研究において先駆的な貢献者となった、米国の経済学者ヘイゼル・カークと、松平の貢献を比較している。両者の知的背景は異なるものの、合理的消費の観念や、家計の意思決定におけるジェンダー役割に焦点を当てる点で、二人の研究には共通点が見られる。他方で、重要な方法論的相違もある。カークの経験主義的、制度志向的、心理学的知見に基づくアプローチは、松平の歴史重視の分析とは対照的である。本性における比較思想研究は、松平の貢献を、英語圏の議論の文脈において位置づけている。

第6章は、松平友子と和田垣謙三と井上英子の三人の経済学的視点を比較検討している。和田垣の生産重視のアプローチや井上の社会改革主義的スタンスと異なり、松平は、経済合理性とジェンダー問題に対して、よりバランスのとれた見解を展開した。本章は、日本の家事経済学者の系譜における、松平の独自の位置を明らかにしている。

およそ以上のような構成からなる本論文は、日本と世界の家事経済学の発展の流れの中に、松平の理論的・思想的貢献を位置づけている。松平の研究の独創性、一貫性、そして歴史的重要性を浮き彫りにしたものであり、博士学位論文として十分に評価することができる。